近世仏塔の意匠と構造(三)

——中部地方の遺構——

濱島正士

一　遺構の建立年代と工匠
二　柱間寸法、柱長さその他
　(1)　五重塔　(2)　三重塔　(3)　多宝塔
三　各部の様式手法
　(1)　五重塔　(2)　三重塔　(3)　多宝塔
四　内部の状況と組上構造
　(1)　五重塔　(2)　三重塔　(3)　多宝塔
五　塔の配置と向き

一　遺構の建立年代と工匠

中部地方（ただし、新潟県は東北・関東地方に含めたので今回は除く）には近世の仏塔が一九基残されている。その内訳は三重塔一二基、五重塔・多宝塔各三基、宝塔一基で、これを県別にみると、富山県三重塔一基、石川県五重塔・三重塔各一基、長野県三重塔五基、岐阜県三重塔三基、静岡県五重塔・三重塔各一基、愛知県五重塔・三重塔・宝塔各一基、多宝塔三基となる。福井・山梨・三重の三県には近世仏塔が一基もないが、山梨県には身延山久遠寺（南巨摩郡身延町）にかつて多宝塔があり、三重県にも旧浄瑠璃寺（上野市）に三重塔があったという。なお、福井県は中世の三重塔なら明通寺三重塔（文永七年〈一二七〇〉）がある。

各塔の建立年代は桃山時代が一基、江戸時代初・中期が一二基、江戸時代後・末期が六基で、比較的近世前半のものが多い。

以上の遺構のほか、長野市の善光寺には寛政八年（一七九六）の年紀がある五重塔の建地割図（縮尺二〇分の一）が残されている。この塔は計画されただけで実現には至らなかったが、ここではこの図の塔も加えて検討を進めることとする。

塔の建立に携った工匠についてみると、木工大工名の判明する塔が十一基、鋳物師名の判明する塔が五基ある。まず、大工については、加賀前田家の菩提寺である妙成寺（石川県小松市）の五重塔（元和四年〈一六一八〉）が同藩の大工頭坂上越後の手になっている。那谷寺三重塔（石川県小松市・寛永十九年〈一六四二〉）も二代藩主前田利常が造営したものであるから、氏名は明らかでないものの、おそらく同じ坂上か山上が関係したのであろう。善光寺五重塔は信濃諏訪の立川和四郎冨棟（立川流初代）の設計であり、光前寺三重塔（長野県駒が根市・文化五年〈一八〇八〉）は二代目立川和四郎冨昌の建立である。立川和四郎は彫物を得意とする大工として、当時信濃国ではよく知られていた。地元あるいは同国の大工が建てた塔としては、このほかに信濃大町の金原又七の若一王子神社三重塔（長野県大町市・宝永八年〈一七一一〉）、信濃北尾（現上水内郡小川村）の松本孫兵衛と同富吉（同）の大久保勘左衛門の高山寺三重塔（長野県上水内郡小川村・元禄十一年〈一六九八〉）佐久野沢（現佐久市）の小林市太郎他二名の貞祥寺三重塔（長野県佐久市・嘉永二年〈一八四九〉）がある。若一王子神社三重塔には棟梁のほかに墨棟梁金原作助の名がみえる。墨棟梁は設計担当の大工と思われるが、ほかにはあまり例を見ない。なお、貞祥寺三重塔はもと旧神光寺（長野県南佐久郡小海町）の塔で、明治三年に貞祥寺へ移された。

他国の大工が建てた塔としては、江戸の中野市右衛門の手になる大石寺五重塔（静岡県富士宮市・寛延二年〈一七四九〉）、近江顔戸村（現滋賀県坂田郡近江町）の羽渕新助家次の横蔵寺三重塔（岐阜県揖斐郡谷汲村・寛文三年〈一六六三〉）がある。大石寺五重塔は亀山藩主板倉勝澄の寄進により造営されたもので、何故に江戸の大工が担当したのかは明らかでない。横蔵寺三重塔の場合は、他国とはいうものの顔戸村は地理的に近いので、当時両地区は交流があったのだろう。興正寺五重塔（名古屋市・文化五〈一八〇八〉）を建てた森甚六、国分寺三重塔（岐阜県高山市・文政三〈一八二〇〉）を建てた水間相模も地元の大工ではないかと思われるが、詳しいことは分からない。また、真禅院三重塔（岐阜県不破郡垂井町・寛永二十年〈一六四三〉）は近くの南宮神社に建てられた塔で、明治維新の際現在地へ移された。幕府作事方御大工木原木工助の設計とみられ、施工は京都の久保権兵衛が一括請負で行っているが、久保権兵衛が木工大工なのか否かは明らかでない。

つぎに、相輪をもつ塔としては木工大工に次いで重要な地位を占めると思われる鋳物師についてみよう。氏名の判明する塔は、那谷寺三重塔が自国加賀の宮崎彦九郎吉綱、若一王子神社三重塔が自国松本の小野吉次と上野松枝正成、高山寺三重塔が越後高田の土肥左

兵衛宅次、油山寺三重塔（静岡県袋井市・慶長十六年〈一六一一〉）が山城三条の早川長兵衛光政、国分寺三重塔が越中高岡の金森与八郎正治である。いま一つ、笠覆寺多宝塔（名古屋市・正保）の露盤銘にある尾州名護屋の大工藤原政長も鋳物師かと思われるが明らかでない。[5] このように、鋳物師の場合は比較的他国の人が多いが、相輪や高欄擬宝珠などの鋳造品は寸法さえ明確にして注文すれば、あとは製品を取付けるだけであるから、工事現場に常駐する必要がないし、現地で鋳造するにしても、大工とは違って短期間の滞在ですむことも一因であろう。なお、国分寺三重塔の場合は現地へ鋳物師が来て鋳造しているが、相輪を四十日位いで鋳終ったという。

一　柱間寸法、柱長さその他

(1)　五重塔

三基の遺構と善光寺古図のあわせて四塔について平面規模をみると、初重総間の寸法は善光寺塔が二六・一尺で最も大きく、次いで大石寺塔の二一・〇九尺、妙成寺塔の一六・〇尺、興正寺塔の一二・九九尺の順となる。このうち、妙成寺塔は近世五重塔の標準的な規模である。各重柱間の枝割は四塔まちまちで、代表的な木割書である「匠明」と同じ枝割をもつ塔はないが、妙成寺塔のように、初重を中央間一二枝・脇間一〇枝として二重以上は各間で一枝ずつ落とす方式は日光東照宮五重塔（文政元年〈一八一八〉）のほか、中世の五重塔遺構にもみられる。大石寺塔は五重のみ扇垂木であるが、五重の柱間割りも枝割によっているのは通例のとおりで、二重以上を扇垂木としている本門寺五重塔（東京・慶長十二年〈一六〇七〉）と寸法は違うものの枝割は各重同一である。善光寺塔は全重とも垂木が描かれてなく、あるいは板軒かとも思われるが、柱間の割付けは枝割によっていると考えられ、各間の比率から表一のように枝割を推定した。

上重における柱間の逓減は、妙成寺・大石寺・善光寺の三塔が各重各間で枝数を一枝ずつ減らしているが、初重の枝数がそれぞれ違うので逓減率も異なり、五重総間／初重総間は妙成寺塔が〇・六二五で最も逓減が大きい。興正寺塔は二重・三重で各三枝、四重・五重で各二枝落としていて上方での逓減が少く、五重総間／初重総間は〇・六九となり、逓減は四塔中最も少ない。「匠明」では二重・三重で各二枝、四重五重で各三枝落としているから、逓減が興正寺塔とは逆の傾向を示すことになる。

ところで、興正寺塔は丸桁の出を通常の六枝ではなく、各重とも七枝としている。丸桁の出を七枝とする例は興福寺五重塔（奈良・

応永三十三年〈一四二六〉と教王護国寺塔（京都・正保元年〈一六四四〉）にみられるが、両塔とも最大級の規模をもつ塔であり、七枝とするのは初重～三重だけである。興正寺塔のように小規模な塔が各重七枝にすると、丸桁の出が大きすぎてやや均衡を欠くきらいがある。

(2) 三重塔

一二基の平面規模をみると、初重総間は九尺級と一〇尺級が各一基、一一尺級と一五尺級が各二基、一二尺級と一四尺級が各三基で、一二尺級以下が七基となり小規模なものが多い。[6] 初重の枝割は一一尺級の高山寺塔、一二尺級の横蔵寺塔・真楽寺塔（長野県北佐久郡・寛延二〈一七四九〉）、一四尺級の若一王子神社塔・日石寺塔（富山県中新川郡上市町・弘化二〈一八四五〉）の五塔が総間三二枝・中央間／脇間を一二枝／一〇枝としているが、これは五重塔・三重塔とも規模の大小を問わず最も一般的な方式である。このうち、日石寺塔は全重扇垂木であるが、柱間の割付けは枝割によっており、そのことは軒支輪で確認できる。横蔵寺・若一王子神社両塔は二重・三重を各間で一枝落ちとした、同じ枝割・逓減になっている。

九尺級の貞祥寺塔と一一尺級の光前寺塔は、初重の枝割が総間三四枝で、中央間／脇間をそれぞれ一六枝／九枝、一四枝／一〇枝として中央間を広くとっている。これは規模が小さいためとくに中央間を広げたのであろうが、貞祥寺塔の一六枝／九枝は多宝塔ならともかく、層塔としては他に例をみない枝割である。両塔の二重・三重の枝割は同じで、三重を扇垂木とする点も同様である。また、両塔は小規模な割に枝数が多く、木柄の小さい塔になっている。そのほかの塔は枝割がまちまちで、同じ方式のものはない。一四尺級の国分寺塔は初重を中央間一二枝・脇間八枝としており、これも中央間と脇間の差が大きい。一五尺級の甚目寺塔（愛知県海部郡甚目寺町・寛永四年〈一六二七〉）は初重総間を二六枝とし、二重・三重は各間で一枝ずつ落としていて、貞祥寺・光前寺両塔とは反対に木柄の太い塔となっている。

那谷寺塔は全重扇垂木であるが、枝割を推定してみると、初重が総間五〇枝で中央間三〇枝・脇間一〇枝、二重が総間二六枝で中央間一〇枝・脇間八枝、三重が総間二三枝で中央間九枝・脇間七枝となる。これでは初重の枝数が多すぎて中央間がきわめて広く、二重・三重との逓減が違いすぎて、他の塔とは全く方式が違う。そこで構造をみると、組物は二重・三重が三手先で初重のみ二手先の詰組になっていて、四天柱上にも出組の組物をおいている。したがって、初重の側回りを裳階、四天柱回りを本屋と考えると、各重総間

の枝割は三〇枝（本屋）・二六枝・二三枝、初重が中央間一二枝・脇間九枝となり、一般的な塔の方式として不都合はない。

一枝の寸法については、油山寺塔を除くと各重で異なる塔はないらしい。[7] 油山寺塔の一枝寸法は、初重が四寸であるのに対して二重が三寸九分と一分小さく、扇垂木の三重は一枝四寸で総間を決めてから、中央間と脇間は一〇／九に割付けている。一枝寸法が二重だけなぜ小さいのかは明らかでない。

つぎに、見え掛りの柱長さ（縁上～台輪上）についてみると、初重では総間寸法の〇・五七～〇・七四五に相当し、最小は若一王子神社塔、最大は横蔵寺塔である。他地域に比べるとやや大きい数値を示す塔が多いが、一般に、小規模な塔は大きな数値となる（初重軸部の丈が高い）ことが多いから、小規模な塔が多い当地域では順当なところであろう。二重の柱長さは初重柱長さの〇・二四五～〇・四六に相当するが、最小の那谷寺塔は前記のようにやや特異な形式であるから、これを除くと〇・三七～〇・四六となる。他地域の塔と比べるとこの方はやや小さ目の数値といえるが、初重の柱長さが総間寸法に比べて少し大き目であったから、二重だけで考えるとほぼ順当といえようか。

組物の寸法については、一般に近世の塔では各重を同一とするものが多く、ここでもすべてを各重同寸とするのが八塔ある。[8] ただし、若一王子神社塔は枠肘木の成が他の肘木より少し高い。それに対して、最も古い油山寺塔だけは上の重ほど小さく、また、光前寺塔は大斗を、国分寺塔は枠肘木の成をそれぞれ初重のみ大きくしている。

以上のように、五重塔と違って三重塔では小さいせいであろうか、中央間を特に広くする例がみられるのである。

(3)　多宝塔

三基の愛知県内の塔のうち、笠覆寺塔と竜泉寺塔（名古屋市・江戸中期）は同じ規模の中型の多宝塔で、下重総間が一六尺、枝割は総間四四枝で中央間一六枝・脇間一四枝となる。長谷院塔（愛知県西春日井郡新川町・江戸中期）は小規模な塔で、下重総間を一〇尺とし中央間と脇間を四尺と三尺に分けている。軒は吹寄垂木であるが繁垂木を想定すると、中央間一二枝・脇間九枝となる。上重の軸部直径は、笠覆寺塔が八・二尺で、下重総間の〇・五一にあたり、遺構の平均的な比率を示す。この塔では下重の四天柱と同じ位置に上重の隅柱が立っているから、下重中央間の$\sqrt{2}$倍が上重直径となるが、こうした上重と下重の関係は同じ愛知県の密蔵院多宝塔（重文・室町時代）がそうであり、両塔は構造や様式手法がよく似ている。竜泉寺塔は上重の実測をしていないが、構造や様式手法が両塔に似

ているので、下重と上重の関係は笠覆寺塔と同じかもしれない。

下重の柱長さは、笠覆寺・竜泉寺両塔が総間の〇・五七、長谷院塔が〇・六二となる。この数値は小規模な長谷院塔がやや大き目であることも含めて平均的といえる。

三　各部の様式手法

(1)　五重塔

三塔のうち、一番新しい興正寺塔が基壇上にあって初重に縁を設けておらず、この点では古式といえる。様式は妙成寺塔と興正寺塔が和様、大石寺塔も五重の軒を扇垂木とするほかは和様である。細部についてみると、三塔とも頭貫に木鼻は付けていないが、組物には拳鼻を入れ、実肘木に絵様を付けている。中備は妙成寺塔が各重各間とも撥束（ただし、四重・五重の脇間は省略）、興正寺塔が中央間にのみあって初重蟇束、二～五重撥束で、大石寺塔は初重を各間蟇股、二～五重を各間蟇束としているが、初重の蟇股は近世の塔に多い十二支の彫刻ではなく、三葉葵や牡丹の紋章の彫刻を入れている。軒支輪は大石寺塔が横板から造り出しの菱支輪、妙成寺塔と興正寺塔は本支輪である。隅木下の持送は妙成寺塔と興正寺塔にあり、興正寺塔は簡単な絵様を付けただけであるが、妙成寺塔はかなり細かい丸彫り彫刻になっている。大石寺塔では二重以上の台輪が長押式であり、同塔と興正寺塔では組物の手先肘木が面戸造り出しになっている。

そのほか雑作では、妙成寺塔が初重中央間桟唐戸の嵌板に花鳥・人物等の浮彫り彫刻を入れており[9]、前述した丸彫りの持送と合わせて、正統派の塔に少し装飾性を加えている。初重中央間の扉は大石寺・興正寺両塔も桟唐戸で、大石寺塔は塔には比較的例の少ない双折れとし、興正寺塔は嵌板に三葉葵の透彫りを付けている。また、興正寺塔では高欄を二重と四重は跳高欄、三重と五重は擬宝珠高欄としている。一重おきに高欄の形式を変えるのは、建立当初からのものとすれば珍しい例である。

このように、遺構の三塔はとくに変ったところはなく装飾性も少ないが、古図にみる善光寺塔は特異な手法をもち、装飾性豊かな塔である。まず、二重基壇上に建つが、基壇に直接高欄を据えている点、遺構には例がない[10]。軸部は正規の和様であるが、組物は大斗上に絵様肘木を置き、持送で三手持出して尾垂木式の竜頭を付け、一手・二手には通肘木を通している。絵様肘木や持送には波や雲の彫刻を付け、琵琶板も彫刻で埋めている。軒は垂木が描かれていないので形式が明らかでないが、彫刻付の板軒でもあろうか。初重の四

面に軒唐破を付けているのは塔では他に例をみない。[11] このように、善光寺塔は彫刻を得意とし、複雑な形式を好んだ大工立川和四郎の面目躍如たるものがある。

(2) 三重塔

様式については、一二塔のうち那谷寺塔が全体を禅宗様とするほかは、日石寺塔が全重扇垂木、油山寺・真楽寺・光前寺・貞祥寺の四塔が三重のみ扇垂木とするものの、ほぼ和様といえる。頭貫に木鼻を付けるのは禅宗様の那谷寺塔だけしかない。日石寺塔の軸部・組物は少し変っていて、各重とも側柱の内側が上方へ延び、頭貫はなくて台輪は片蓋、組物は二手先で手先肘木・尾垂木が側柱へ差し止められている。那谷寺塔も初重のみ組物を二手先としているが、これは前述したごとく、初重を裳階のように扱っているからであろう。拳鼻は那谷寺塔のほか真禅院・真楽寺・国分寺・日石寺・貞祥寺の五塔にある。尾垂木は横蔵寺塔の初重が絵様付の変形のもので、隅の二重尾垂木も初重が竜、二重・三重が絵様付となっている。また、光前寺塔では平の尾垂木が水平材から造り出され、隅行尾垂木は竜としている。軒支輪は那谷寺塔が板支輪で、和様の一一塔のうち、光前寺・国分寺・貞祥寺三塔が彫刻付板支輪、ほかは正規の本支輪である。なお、若一王子神社塔では大斗に皿を付けている。

中備は真禅院・若一王子神社両塔が初重は三間とも蟇股、横蔵寺塔も現在は中央間が彫刻に替っているが、もとは三間とも蟇股であったのだろう。このうち、若一王子神社塔は蟇股内の彫刻を擬人化した十二支としている。光前寺塔は各重各間に丸彫り彫刻を入れ、通肘木上に斗を密に並べている。真楽寺・国分寺両塔は初重が中央間蟇股・脇間撥束、二重・三重が撥束（国分寺塔は脇間省略）である。油山寺塔は中央間のみ初重撥束、二重・三重が簑束であるが、三重の簑束は異形のものであり、二重は各面で意匠を変えるなど、多彩な扱いである。また、隅木下の持送の意匠も初重・二重では各面が異なる。この塔は天正二年（一五七四）に着工して十七年後の慶長十六年頃竣工したもので、寸法や意匠の上で特に違いの大きい三重は、初重・二重と大工が別人なのかもしれない。日石寺塔は各重各間に撥束を、甚目寺塔は初重中央間にのみ撥束を入れている。高山寺・貞祥寺両塔は全く中備を置かない。禅宗様の那谷寺塔は初重中央間のみ詰組とし、初重の各間（詰組の間にも）と二重・三重の中央間には簑束を入れている。

つぎに、柱間装置その他についてみると、甚目寺・真禅院両塔は各重各間とも中央間板扉・脇間板壁とする正規の手法を守っている。両塔のうち真禅院塔の方は、前記のように蟇股や拳鼻があり、

隅木下には雲文を彫った持送を入れていていくらか装飾性を加えているが、甚目寺塔は装飾的な部材は全くない。油山寺塔は初重中央間のみ桟唐戸とするほかはすべて板壁である。

禅宗様の那谷寺塔は初重の柱間装置を中央間桟唐戸・脇間板壁とし、扉の嵌板をはじめ脇間壁板、内法小壁等全面に菊・菊水(扉)・獅子に牡丹(壁板)・牡丹(小壁)等の浮彫り彫刻を施しており、きわめて装飾性に富んでいる。禅宗様と和様の違いはあるものの、浮彫り彫刻を付ける点で妙成寺五重塔と似たところがあり、同じ加賀藩の造営であることから、妙成寺塔と同じ阪上または山上一族の大工が建てたと考えてよかろう。貞祥寺塔は初重が中央間桟唐戸で脇間は框を回して浮彫り彫刻を施した板を嵌め、二重・三重は中央間板扉・脇間板壁としている。

以上五塔は柱間装置が四面とも同じであるが、以下の六塔は四面同じではなく、柱間装置によって正面が決まることになる。高山寺塔は初重は四面とも中央間桟唐戸・脇間板壁であるが、二重・三重は正面にあたる西面のみ中央間板扉・脇間板壁、ほか三面は中央間も板壁としている。残る五塔は初重も違っていて、光前寺・国分寺の二塔は背面のみ、若一王子神社塔は正面のみが異り、横蔵寺・真楽寺両塔は正面・側面・背面がそれぞれ異る。光前寺塔は初重の正面・側面が中央間桟唐戸・脇間連子窓、背面(南面)が中央間板扉・脇間板壁で[12]、二重・三重は四面とも中央間板扉・脇間板壁とするものの、背面の板扉には幣軸を付けていない。この塔は前述したように組物では琵琶板を彫刻で充塡し、一部に竜の尾垂木を用い、軒支輪を彫刻付板支輪とするなど装飾性に富むが、同じ立川流の初代和四郎が設計した善光寺五重塔ほど変ったところはない。国分寺塔はほぼ伝統的な手法になる塔であるが、初重の柱間装置では正側面を中央間板扉・脇間連子窓と正規の構えにしながら、背面(東面)だけは腰長押を通して中央間板壁・脇間連子窓として伝統性をくずしている。二重・三重は各間とも板壁である。若一王子神社塔は初重の中央間を各面とも桟唐戸とするものの、脇間は正面にあたる西面のみ連子窓、ほか三面は額縁付板壁としている。二重・三重は各面とも中央間板扉・脇間板壁である。この塔は比較的木柄が太く、ほぼ正統派の塔といえる。横蔵寺塔は初重の正面のみ中央間幣軸付板扉・脇間連子窓と正規の構えであるが、側面は中央間を中敷居付幣軸なしの板扉、背面は中央間火灯窓・脇間板扉とするなど、正規の扱いではない。この塔は前述したように、異形の尾垂木を入れるなど組物にも変ったところがある。真楽寺塔も初重は正面が中央間桟唐戸・脇間連子窓、側面は中央間連子窓・脇間板壁、背面は各間板壁で、二重・三重は正面・側面が中央間板扉・脇間板壁、背面各間板壁となっている。

なお、日石寺塔は未完成で柱間装置が設けられていないが、柱その他にみられる仕口から、四面各重とも中央間扉・脇間窓とする予定であったことが分かる。

このように、三重塔では柱間装置の形式を変えて正面性を明確にしたものが多い。

(3)　多宝塔

笠覆寺塔と竜泉寺塔は、前にも述べたように下重の規模・枝割がほとんど同じであるが、軸部・組物・軒など各部の形式も同様である。軸部は下重の柱上部に粽を付け、腰長押・内法長押は設けず、頭貫・台輪に木鼻を付けたほぼ禅宗様のもので、柱間装置は各面とも中央間桟唐戸・脇間連子窓である。上重も粽付の柱に長押は設けず、中央間は桟唐戸を藁座で釣り込んでいる。組物もほぼ禅宗様で、下重出組・上重四手先とし、下重では壁付に禅宗様系の長手肘木を入れ、上重は壁付・二手・三手の肘木上に絵様肘木を入れ、隅行手先肘木下には持送を設けている。下重の中備には三間とも蟇股をおく。細部の意匠等は両塔で少し違っていて、上重の脇間板壁に笠覆寺塔は格狭間形の彫刻を付けるのに対し、竜泉寺塔は連子を造り出している。また、組物では竜泉寺塔は下重蟇股に絵様肘木を入れており、笠覆寺塔は上重の軒天井・軒支輪板に菱繋ぎ等の地紋彫りを付けている。このように、両塔はきわめてよく似ており、建立年代には少し差があるものの、おそらく同系統の大工の手になったのであろう。愛知県内では室町時代建立の密蔵院多宝塔（重文・春日井市）が両塔とよく似たほぼ禅宗様の様式手法をもっている。

長谷院塔も下重の軸部は禅宗様系で前記二塔と似たところがあるが、組物や軒は全く違って特異な手法をもつ。すなわち、下重の組物は大斗肘木、軒は一軒吹寄垂木、上重は組物が四手先、軒が一軒扇垂木で、とくに上重組物は正規の四手先ではなく、二手までは肘木で持出し、三手・四手は一木の大きな持送状の絵様肘木とし、その先端に斗を一個おいて丸桁・実肘木を支持している。柱間装置は正側面三方が中央間桟唐戸・脇間連子窓で、背面は三間とも板壁である。

以上のように、愛知県の三塔は禅宗様の手法が混っているほか、長谷寺塔は特異な形式をもっている。

四　内部の状況と組上構造

(1)　五重塔

妙成寺塔の初重内部は心礎上に立つ心柱の四面を板で囲い、細い

四天柱を立てて禅宗様の頭貫・台輪を組み、三斗を置いて琵琶板は牡丹唐草の浮彫で埋めている。四天柱間には禅宗様の須弥壇を構えて釈迦・多宝の二仏を安置し、天井は和様の小組格天井を張る。このように、内部は伝統的な和様の手法になる外部とはかなり雰囲気が違う。二重以上の組上構造は下重の地垂木・隅木上に盤を置いて柱を立てる、伝統的な積上げ方式である。

大石寺塔は心柱を心礎上に立て、四天柱間の側面と背面を板で囲い、須弥壇を構えて板曼荼羅を祀り、天井には鏡天井を張っている。二重以上は下重繋肘木上に盤を置いて側柱・四天柱を立てる方式で、側隅柱だけは下重隅木上に組んだ盤(両側の平柱に差し止める)上に立つ。したがって、下重の隅木・尾垂木は尻が四天柱に差し止められることになる。

興正寺塔も心柱は心礎上に立って四面を板で囲い、四天柱間に須弥壇を設け、隅行方向に来迎壁を張り、四仏を祀っている。床は土間で、天井は折上格天井とする。二重以上は側柱・四天柱とも下重の地垂木・隅木上の柱盤に立つが、この柱盤は真桁及び繋肘木上に盤を置いて束立ちで支持されており、隅木・尾垂木は四天柱下の束に差し止められている。手先肘木尻が完全な繋肘木となるのは上二丁だけで、下二丁は四天柱で止まる。この繋肘木は側柱・四天柱間で縦に長い貫を通し、鼻栓を打って締め付けている。興正寺は貞享五年(一六八六)に開創された新しい寺院で、幕末に建立された塔も相輪が特に短く時代相応の比例を示しているが、初重に縁や床板を設けないことや組上構造などには古風な点もみられる。

善光寺塔については、古図が立面だけしか描いていないので、内部のことは分からない。

(2) 三重塔

三重塔の遺構をみると、平安時代末期以降心柱は初重天井上に立てるのが通例であるが、日石寺塔では心柱が心礎上に立てられていて、きわめて珍しい例といえる。四天柱については、前二本を省略して来迎柱だけとするのは高山寺・真楽寺両塔だけで、他の一〇塔は四天柱が揃っている。来迎柱だけの例は中世後期の遺構に多く、近世になって四天柱の揃う例が多いのは他の地域でも同様である。来迎柱の二塔はいずれも仏壇回りの構えが通常とは変っていて、高山寺塔では来迎柱上部に蓮弁を設け、須弥壇が柱より横に張り出している。須弥壇の幅が広いのは、本尊の釈迦・阿弥陀・大日の三仏を横一列に安置するためであろうか。真楽寺塔は来迎柱間に虹梁、来迎柱側柱間に繋ぎ材を入れ、来迎柱の奥に大日如来を納めた厨子を安置している。このように、仏壇回りを仏堂と同じような構えとする塔は例が少く、ほかには福島県の隠津島神社三重塔(延宝二年

〈一六七四〉と安洞院多宝塔（文化九年〈一八一二〉）ぐらいしかない。

四天柱の揃う一〇塔のうち、那谷寺・若一王子神社・光前寺・貞祥寺と日石寺の五塔は来迎壁がなく、残る五塔は来迎壁を設けている。禅宗様の那谷寺塔は初重内部もほぼ禅宗様で造られており、四天柱に頭貫・台輪を組んで出組の組物を詰組とし、側柱とは海老虹梁で繋ぎ、床は石敷で天井は側回りを化粧屋根裏、四天柱内を小組格天井としている。須弥壇は設けず、台を置いて本尊の阿弥陀如来を安置している。若一王子神社・光前寺両塔は四天柱に須弥壇（若一王子神社塔は禅宗様）を設け、ともに大日五仏を祀る。天井は若一王子神社塔が折上格天井、光前寺塔が鏡天井である。貞祥寺塔は四天柱内に禅宗様の須弥壇を置いて地蔵菩薩を安置し、天井は側回り格天井、四天柱内鏡天井としている。日石寺塔は未完成ではあるが、四天柱と側柱を内法貫で繋ぎ、四天柱間には虹梁と腰貫を入れていることから、天井・仏壇を設ける計画であったことが分かる。また、側柱・四天柱とも土台上に立てられており、おそらく土台上に床を張るつもりであったのだろう。心柱が通っていることと四天柱に板決りがないことから、来迎壁は設けないことが分かる。

来迎壁のある五塔のうち、甚目寺塔は外部と同じく内部も和様の正規の造りで、四天柱内に格狭間付の須弥壇を設けて愛染明王を安置し、折上小組格天井を張っている。国分寺塔は四天柱間に低い壇を造り、後ろ寄りに禅宗様仏壇を構えて大日如来を安置しており、天井は鏡天井を張る。油山寺・真禅院・横蔵寺三塔は後ろ寄りに須弥壇を構え（真禅院塔は禅宗様）、それぞれ大日如来を安置している。油山寺塔は天井が少し変っていて、側回りは格天井であるが四天柱内は輪垂木天井である。真禅院塔は折上げ小組格天井を張っており、須弥壇を禅宗様とするもののおおむね正統派の造りといえる。横蔵寺塔は側回りが折上格天井、四天柱内が折上小組格天井である。

二重以上は、国分寺塔では各重に梯子を設け、床を張り仏壇を構えており、高山寺塔でも初重から二重へは梯子を掛け、二重に簡単な床を張っている。日石寺塔も二重・三重に簡単な床を張り、四天柱を丸く仕上げて柱間に虹梁と腰貫が入っていることから、仏壇を設ける計画であったことが分かる。

つぎに、組上構造についてみると、伝統的な積上げ方式をとるのは甚目寺塔だけで、ほかは油山寺・国分寺両塔がこれに近い。油山寺塔は繋肘木上に四天柱と同じ太い束を立てて尾垂木尻をこれに差し止め、その上に隅木・地垂木掛をおき、盤をおいて四天柱を立てている。側柱は地垂木上の柱盤に立つ。国分寺塔は側柱の内部の鬚太を延ばして繋肘木を輪薙ぎ込ませ、四天柱は上方へ延びて地垂木

掛を受け、繋肘木を差し通し、尾垂木を差し止めている。横蔵寺塔は十分な調査が出来なかったが、国分寺塔と似た方式かと思われる。

真禅院塔は側柱が地垂木・隅木上の柱盤に立ち、四天柱は繋肘木上の柱盤に立つ折衷方式である。真楽寺塔もこの方式に入るが、手先肘木が繋肘木となるのは一段だけで、桁行と梁間を背違いに通している。若一王子神社塔も四天柱は繋肘木上に立つが、側柱は隅柱のみ隅木上に立ち、平柱は尾垂木上に盤をおいて立つ。これら三塔では、尾垂木・隅木の尻は四天柱へ差し止められている。

光前寺塔と貞祥寺塔はよく似た方式で、側柱が立つ柱盤は隅木上にあると同時に下の大梁(丸桁桔ともなる)から束を立てて支持されている。一方、四天柱は下重の大梁上に立ち、柱天に大梁をのせているから、いわゆる櫓方式である。手先肘木尻は四天柱に差し止められて繋肘木とはならず、尾垂木・隅木尻も四天柱に差し止められる。ただし、光前寺塔では尾垂木が三段目の手先肘木から造り出されている点が少し違う。また、同塔では平に入る桔木の尻を四天柱に差し止める点が変っている。

那谷寺塔は少し変った方式で、二重では側柱を初重四天柱組物上に置いた盤上に立て、四天柱は側柱盤上に渡した柱盤に立てて柱天に繋肘木をのせ、三重では側柱が尾垂木上に置いた柱盤に立ち、四天柱は二重四天柱と同じ位置に繋肘木をはさんで立っている。日石寺塔もまた変っていて、側柱は下重地垂木上柱盤に立つが内方半分が上方へ延びて真桁を支持し、壁付の斗栱はすべて片蓋となり、手先肘木は柱へ枘差し鼻栓止めとなっている。隅木上に立つ四天柱も上方へ延びて垂木掛を柱天におく。隅木は心柱へ差し止められているが、これはきわめて珍しい。

以上のように、この地域の組上構造は変った方式が多いといえる。

(3) 多宝塔

笠覆寺塔の下重内部は、四天柱に頭貫を組み大斗を置いて桁をのせ、内法位置には正側面三方に虹梁を入れ、来迎壁・須弥壇を設けて大日如来を安置している。側柱の組物と四天柱とは海老虹梁で繋ぎ、側回りを化粧屋根裏、四天柱内は小組格天井とする。四天柱桁の上には大梁を井桁に組み、組手真に上重の側隅柱を立て、その外側に盤をおいて平柱各二本を立てている。上重に四天柱はない。同塔の構造形式は全体にわたって密蔵院多宝塔によく似ているが、密蔵院塔では四天柱が上へ延びてその上に直接上重隅柱の立つ点だけが異る。[13] 竜泉寺塔の下重内部も笠覆寺塔と似ていて、四天柱を立てて来迎壁・須弥壇を設け、側回りと海老虹梁で繋ぎ、入側は化粧屋

屋根裏、四天柱内は小組格天井としている。笠覆寺塔と異る点は、四天柱間に繋虹梁が無いこと、四天柱上に三斗を組んでそれに海老虹梁を組込んでいること等である。上重については調査ができず、明らかにしえない。

長谷寺塔の下重内部は、四天柱を立てて正側面三方に繋虹梁を入れ、側回りとは虹梁で繋ぎ、入側は化粧屋根裏とし、四天柱内には鏡天井を張り、来迎壁・須弥壇を設けて愛染明王を祀っている。本尊の愛染明王には天保七年（一八三六）の銘があり、それ以前は何を祀っていたのか明らかでない。このように、本塔も笠覆寺・竜泉寺両塔と共通するところがあり、禅宗様の手法も認められる。愛知県下には中世の多宝塔遺構が七基あって、性海寺塔（室町時代）・知立神社塔（永正六年〈一五〇九〉）・大樹寺塔（天文四年〈一五三五〉）・万徳寺塔（室町時代）のようにほぼ和様からなる塔もあるのに、近世の遺構が三塔とも禅宗様色の濃い密蔵院塔の系統を引くことは興味深い。

五　塔の配置と向き

おしまいに、伽藍における塔の配置と向きについて、五重塔・三重塔・多宝塔をまとめてみてみよう。なお、明治時代に移築された真禅院・貞祥寺両三重塔の現状については問題外とする。塔の配置で最も多いのは、南面する本堂の前方東か西に位置するもので、油山寺・横蔵寺・高山寺・真楽寺・国分寺の各三重塔と長谷院多宝塔（以上東側）、甚目寺三重塔と笠覆寺・竜泉寺両多宝塔（以上西側）がこれに相当する。さらに、光前寺三重塔も寺院の向きは異るものの、塔の配置関係は同じで、東向きの本堂の手前南側にある。この配置は中世以降、宗派の別なく中規模の寺院に広く見られるもので、古代の大寺院、例えば教王護国寺や醍醐寺を簡略化した伽藍形式ということができよう。中部地方における中世塔の遺構でも三明寺三重塔、性海寺・観音寺両多宝塔など、この配置のものは多い。

塔の向きは、油山寺・高山寺・国分寺・甚目寺・笠覆寺・竜泉寺・光前寺の六塔が本堂と門をつなぐ軸線を向いているのに対し、横蔵寺・真楽寺・長谷院の三塔は本堂と同じ南側を向いている。五重や三重の層塔はもともと外部の四面が同じ造りで、内部の須弥壇回りも四面同じであり、本尊も奈良時代に多い四仏や釈迦八相像では四方を向いていて、正面を特定する要素はない。しかし、平安時代になって大日如来の独尊や五仏を本尊として祀るようになると、塔そのものの造りは同じでも本尊の向きによって正面はおのずと決まってくる。さらに、平安時代末になって心柱が初重天井上に立つものが現われ、鎌倉時代末以降来迎壁が設けられたり、来迎柱だけ

になったりすると、内部では明確に正面性が示される。中部地方の中世遺構でみると、三明寺三重塔（享禄四年〈一五三一〉）がその一例である。さらに降って江戸時代になると、真楽寺・光前寺・国分寺各塔のように側回りでも柱間装置を変えて正面性をもつ塔が現われることになる。

一方、多宝塔では、内部の来迎壁や来迎柱に加えて外部の柱間装置を変えて正面性をもたせることがすでに室町時代の遺構にみられる。中部地方では知立神社多宝塔（永正六年〈一五〇九〉）・観音寺多宝塔（天文五年〈一五三六〉）がそうした例である。これは、もともと多宝塔が大日如来や釈迦・多宝二仏を祀って本尊の向きを特定させる仏堂的要素をもっていたからと考えられる。

ところで、類例の多い一般的な配置ではなく、やや特殊な配置をとるものもある。妙成寺五重塔は南面して並び建つ本堂・祖師堂の前方西側にあるが、門は本堂の前方東側にあって、この門を東から入った正面突き当りに五重塔があり、その手前を北へ折れ曲って本堂等に至る配置である。塔の向きについては、内部須弥壇回り、側回り柱間装置とも四面同じで、正面を特定する要素はないが、本尊は釈迦・多宝二仏が北向きに祀られている。この配置は方位こそ異るが同じ日蓮宗の法華経寺（千葉）もほぼ同じであり、日蓮宗の本山級寺院における一形式と考えられる。同じ日蓮宗の本山級寺院でも大石寺は少し違っていて、南北の軸線上に御影堂があり、御影堂のほぼ真東にあたる一段高くなった木立の中に、五重塔が西向きに建っている。

また、興正寺は江戸時代開創の新しい寺院であるが、伽藍配置は五重塔と本堂を南北の軸線上に並べる四天王寺式に近い形式をとっている。塔の向きについては正面を特定する要素はなく、本尊も四方仏を祀っていて古式である。なお、五重塔の方が三重塔や多宝塔より建築としては複雑な形式で格が上であり、一般的にみて大規模な寺院に建てられていることはいうまでもない。

那谷寺はやや複雑な地形に寺地を占めていて、寺地のほぼ中央にある池の南側斜面に本堂、北側の狭い台地に三重塔が向き合う形に建てられている。塔は四面同じ造りで、本尊阿弥陀如来の向きによって正面が決まる。日石寺も山地に伽藍があり、西向きに建つ本堂（不動堂）の後方南側の高い所に三重塔が建っている。雑作が未完成であるため塔の造りによる正面性の有無は判断できず、本尊に何を祀る計画であったのかも明らかでない。

神仏習合の形をとっていた若一王子神社では、本殿・拝殿と拝殿東側の観音堂が南面し、観音堂の前方に三重塔が西向きすなわち本殿の軸線を向いて建っている。塔は柱間装置にも正面性がみられることは先に述べた。本殿・拝殿と塔の関係だけからすると、この配

置は例が多く、中部地方では知立神社多宝塔もそうである。また、もと南宮神社にあった真禅院三重塔は、古図によって旧位置をみると、東面する社殿の一郭の外側南にあって、おそらく東向きに建っていたものと思われる。塔の後方南側に東照宮があるので、塔は東照宮に属していたのかもしれない。なお、塔は外部の造りが四面同じで、内部須弥壇回りの造りによって正面が決まる。

註

(1) 「近世仏塔の意匠と構造(一)」『国立歴史民俗博物館研究報告第十七集』(昭和六十三年三月)所収。
(2) 『身延鑑』(『古事類苑』宗教部四所収)による。
(3) 『日本塔総鑑』(中西享)による。
(4) 各塔の建立年代は表一及び参考資料に示すとおりである。なお、竜泉寺多宝塔については、『愛知県の近世社寺建築』等で慶長二年(一五九八)の建立で後補の部分が多いとしているが、むしろ江戸時代中期の建立とみた方がよい。
(5) 露盤の北面に「尾州名護屋住、大工藤原政長」と読める陽刻銘があるが、そのほかに年紀等があるか否かは明らかでない。
(6) 初重総間について、ここでは尺未満を四捨五入している。
(7) 横蔵寺三重塔については、二重以上の実測ができなかったので、確かなことは分からない。
(8) この場合も、実測のできなかった横蔵寺三重塔は考慮に入れない。
(9) 現在西面の桟唐戸には浮彫り彫刻が付いていないが、嵌板が後補のものに変っているのであろう。
(10) 基壇上に高欄を据えた塔は、中世の絵図では「春日社宮曼荼羅」の春日社両五重塔、「笠置寺曼荼羅」の笠置寺十三重塔などにみられる。
(11) 軒唐破風を付けた塔の遺構としては、福島県の安洞院多宝塔(文化九年〈一八一二〉)が下重の正面にのみ設けている。
(12) 光前寺三重塔は、現在は東側を正面のように扱っているが、柱間装置からみれば明らかに北側が正面にあたる。
(13) したがって、密蔵院多宝塔の場合は上重の軸部直径が下重中央間の$\sqrt{2}$倍となる。

(本館　情報資料研究部)

中部地方の近世仏塔一覧

表—1 五重塔

番号	名称	所在地	建立年代	工匠名	重別	総間(S) 寸法	総間(S) 枝	中央間 寸法	中央間 枝	中央間 1枝寸法	脇の間 寸法	脇の間 枝	脇の間 1枝寸法	逓減 寸法	逓減 率	軸部高
1	妙成寺	石川県羽咋市	元和4(1618)〔棟札〕	大工坂上越後守嘉紹〔同左〕	初	16.00	32	6.00	12	0.50	5.00	10	0.50	1.50	1.0	9.75
					二	14.50	29	5.50	11	〃	4.50	9	〃	〃		
					三	13.00	26	5.00	10	〃	4.00	8	〃	〃		
					四	11.50	23	4.50	9	〃	3.50	7	〃	〃		
					五	10.00	20	4.00	8	〃	3.00	6	〃		0.625	
2	大石寺	静岡県上宮市上条	寛延2(1749)〔文書〕	大工江戸中野市右門〔同左〕	初	21.09	37	7.41	13	0.57	6.84	12	0.57	1.71	1.0	10.00
					二	19.38	34	6.84	12	〃	6.27	11	〃	〃		
					三	17.67	31	6.27	11	〃	5.70	10	〃	〃		
					四	15.96	28	5.70	10	〃	5.13	9	〃	〃		
					五	14.25	(25)	5.13	(9)	〃	4.56	(8)	〃		0.675	
3	興正寺	名古屋市昭和区八事本町	文化5(1808)〔棟札〕	番匠森甚六辰清・勝野利助・小河左吉〔同左〕	初	12.99	32	4.87	12	0.405	4.06	10	0.405	1.215	1.0	
					二	11.775	29	4.465	11	〃	3.655	9	〃	〃		
					三	10.56	26	4.06	10	〃	3.25	8	〃	0.81		
					四	9.75	24	3.25	8	〃	3.25	8	〃	〃		
					五	8.94	22	3.25	6	〃	2.845	7	〃		0.69	
4	善光寺古図	長野市元善町	寛政8(1796)	立川冨棟	初	26.10	(35)	9.70	(13)		8.20	(11)		2.25	1.0	
					二	23.85	(32)	8.95	(12)		7.45	(10)		2.29		
					三	21.56	(29)	8.18	(11)		6.69	(9)		2.22		
					四	19.34	(26)	7.44	(10)		5.95	(8)		2.25		
					五	17.09	(23)	6.69	(9)		5.20	(7)			0.655	

表―2　三重塔

番号	名称	所在地	建立年代	工匠名	重別	総間(S) 寸法	総間(S) 枝	中央間 寸法	中央間 枝	中央間 1枝寸法	脇の間 寸法	脇の間 枝	脇の間 1枝寸法	逓減 寸法	逓減 率	軸部高
1	日石寺	富山県中新川郡上市町大岩	弘化2(1845)〔記録〕	大工富山河原町中村清助〔同左〕	初	14.40	(32)	5.40	(12)	0.45	4.50	(10)	0.45	0.90	1.0	9.125 (0.63S_1)
					二	13.50	(30)	4.50	(10)	〃	4.50	(10)	〃	0.90		3.47
					三	12.60	(28)	4.50	(10)	〃	4.05	(9)	〃		0.875	3.37
2	那谷寺	石川県小松市那谷町	寛永19(1642)〔露盤刻銘〕	治工当国釜屋宮崎彦九郎藤原朝臣吉綱	初	9.67	(50)	5.79	(30)	0.193	1.94	(10)	0.194	4.652	1.0	6.17 (0.64S_1)
					二	5.018	(26)	1.93	(10)	〃	1.544	(8)	0.193	0.579		1.51
					三	4.439	(23)	1.737	(9)	〃	1.351	(7)	〃		0.459	1.51
3	高山寺	長野県上水内郡小川村高山寺	元禄11(1698)〔棟札〕	工匠松本孫兵衛秀預、大久保勘左衛門秀典、鋳物師大工越後、高田土肥左兵衛尉藤原宅次	初	11.09	32	4.16	12	0.346	3.465	10	0.346	2.12	1.0	8.00 (0.72S_1)
					二	8.97	26	3.45	10	0.345	2.76	8	0.345	2.10		3.525
					三	6.87	20	2.75	8	0.344	2.06	6	0.344		0.62	2.945
4	若一王子神社	長野県大町市大町王子裏	宝永8(1711)〔棟札〕	棟梁大町金原又七、墨棟梁金原作助、鋳物師当国松本小野吉次、上野国松枝藤原正成	初	13.775	32	5.165	12	0.431	4.305	10	0.431	1.29	1.0	7.79 (0.57S_1)
					二	12.485	29	4.735	11	〃	3.875	9	〃	〃		2.86
					三	11.195	26	4.305	10	〃	3.445	8	〃		0.81	2.70
5	真楽寺	長野県北佐久郡御代田町塩野	寛延2(1749)頃〔文書〕		初	12.48	32	4.68	12	0.39	3.90	10	0.39	1.56	1.0	7.725 (0.62S_1)
					二	10.92	28	3.90	10	〃	3.51	9	〃	1.95		3.04
					三	8.97	(23)	3.51	(9)	〃	3.73	(7)	〃		0.72	2.505

番号	名称	所在地	建立年代	工匠名	重別	総間(S) 寸法	総間(S) 枝	中央間 寸法	中央間 枝	中央間 1枝寸法	脇の間 寸法	脇の間 枝	脇の間 1枝寸法	逓減 寸法	逓減 率	軸部高
6	光前寺	長野県駒ガ根市赤穂	文化5(1808)〔棟札〕	大工棟梁当国上諏訪立川和四郎〔同左〕	初	10.88	34	4.48	14	0.32	3.20	10	0.32	1.28	1.0	6.43 (0.59S_1)
					二	9.60	30	3.84	12	〃	2.88	9	〃	〃		2.965
					三	8.32	(26)	3.20	(10)	〃	2.56	(8)	〃		0.765	2.71
7	貞祥寺	長野県佐久市前山	嘉永2(1849)〔露盤刻銘〕明治3(1870)移築	棟梁野沢小林市太郎、立川賢之助、高見沢賢蔵〔記録〕	初	8.965	34	4.225	16	0.264	2.37	9	0.263	1.055	1.0	6.335 (0.71S_1)
					二	7.91	30	3.17	12	〃	2.37	9	〃	1.05		2.68
					三	6.86	(26)	2.64	(10)	〃	2.11	(8)	〃		0.765	2.545
8	真禅院(旧南宮神社)	岐阜県不破郡垂井町	寛永20(1643)〔造営文書〕		初	14.50	30	5.80	12	0.483	4.35	9	0.483	1.45	1.0	9.34 (0.645S_1)
					二	13.05	27	5.316	11	〃	3.867	8	〃	1.934		3.44
					三	11.116	23	4.35	9	〃	3.383	7	〃		0.77	3.84
9	横蔵寺	岐阜県揖斐郡谷汲村上神原	寛文3(1663)〔文書〕	大工江州坂田郡顔戸村羽渕新助家次〔同左〕	初	12.00	32	4.50	12	0.375	3.75	10	0.375			8.945 (0.745S_1)
					二		29		11			9				
					三		26		10			8				
10	国分寺	岐阜県高山市総和町	文政3(1820)〔『飛騨史要』〕	大工棟梁水間相模鋳物師越中住金森与八郎藤原正治〔擬宝珠刻銘〕	初	14.285	28	6.125	12	0.51	4.08	8	0.51	2.04	1.0	8.81 (0.62S_1)
					二	12.245	24	5.105	10	〃	3.57	7	〃	2.045		3.405
					三	10.20	20	4.08	8	〃	3.06	6	〃		0.71	2.835

11	油山寺	静岡県袋井市村松	慶長16(1611)〔伏鉢刻銘〕	鋳物師大工山城国愛宕郡三条釜之座早川長兵衛藤原光政〔同左〕	初	12.00	30	4.80	12	0.40	3.60	9	0.40	1.86	1.0	7.85 (0.65S_1)
					二	10.14	26	3.90	10	0.39	3.12	8	0.39	1.74		3.08
					三	8.40	(21)	3.00			2.70				0.70	3.19
12	甚目寺	愛知県海部郡甚目寺町甚目寺	寛永4(1627)〔柱盤刻銘〕		初	15.028	26	5.78	10	0.578	4.624	8	0.578	1.734	1.0	9.73 (0.65S_1)
					二	13.294	23	5.202	9	〃	4.046	7	〃	〃		4.08
					三	11.56	20	4.624	8	〃	3.468	6	〃		0.77	4.04

表一3　多宝塔

番号	名称	所在地	建立年代	工匠名	下重柱間				上重径	下重軸部高	下重			上重	
					総間	中央間	脇の間	1枝寸法			柱	組物	軒	組物	軒
1	笠覆寺	愛知県名古屋市南区笠寺上新町	正保〔記録〕	大工藤原政長〔露盤刻銘〕	15.97 44枝	5.81 16枝	5.08 14枝	0.363	8.2 (0.51S)	9.155 (0.57S)	円	出組	二軒 平行	四手先	二軒 扇
2	長谷院	愛知県西春日井郡新川町西堀江	江戸時代中期		10.015 (30枝)	4.005 (12枝)	3.005 (9枝)	吹寄 垂木		6.17 (0.62S)	円	大斗肘木	一軒 吹寄	四手先 (特異)	一軒 扇
3	竜泉寺	愛知県名古屋市守山区吉根松洞	江戸時代中期		16.06 44枝	5.84 16枝	5.11 14枝	0.365		9.18 (0.57S)	円	出組	二軒 平行	四手先	二軒 扇

註 1. 寸法は尺を単位とする。
2. 枝数の（　）は扇垂木の場合を示す。
3. 表一2のうち、2・8・11は重要文化財修理工事報告書、12は文化庁所蔵図面によった。

資　料

一　妙成寺五重塔

〔棟札〕文化庁「指定説明」による。

帝範云良匠無弃材明君無弃　士矣斯言誠哉其曲者中鈎其直者　應繩
為其梁柱者為之梁柱為其桷榱者為之桷榱則經營速成功　爰予相看洛
陽建仁寺之内匠頭　坂上越後守嘉任人相兼和漢工匠　之道則受印可

（表）一章其言云不殘意　底令口傳畢今建這塔廟影彼秘傳　快気最深依之
從初一斧至供養終ニ　毎日誦久遠要偈以擬祈願丹誠請永　々支捉相
續而一見一礼輩達成來　縁耳至祝〻〻　越前北庄住坂上越後守
元和萬〻著雍敦牂暦仲夏良辰　嘉紹（花押）

（裏）なし

二　興正寺五重塔

〔棟札〕

文化第五戊辰年　森河　園吉　吉田善兵衛　同行杉之町　萬屋助重良
勝野　利助　武内與吉　同　鍋屋町　木瓜屋木七
古田源四良　稲垣利左衛門
（表）五層塔番匠　森甚六辰清　森門人　伊藤與吉　同　小牧町　北山屋市左衛門
小河　佐吉　木下　甚吉　櫻井文右衛門　同　飯田町　材木屋八右衛門
山田甚左衛門
三月摩詞師利日　小鞠　伊助　小河惣七

（裏）なし

三　日石寺三重塔

『大岩山沿革記』（第十四世一覚和尚編）

第十二世覚待和尚（安政五年十一月五日入寂）

山門及三重塔建立

天保十四ヲ以テ塔ノ石突始メ、夫ヨリ三ケ年ヲ□□□□

一重宛建テ上ケタリト云ウ、富山河原町ノ中村清助ナリ

四　那谷寺三重塔

〔露盤銘〕『修理工事報告書』による。

奉創建那谷寺宝塔一宇者為容河沙菩薩之瑶座救一切繫縁之群萌也倚賴斯誠心
幕府千秋新君萬年及自臣至子孫雲仍武徳長遠家運繁栄各保康寧躋寿域永蒙安
冨尊顕之冥助矣

寛永十九壬午歳九月吉日

大檀越従三位黄門兼肥前守加越能前大敎源朝臣　利常　敬白

冶工当国釜屋宮崎彦九郎藤原朝臣吉綱

五　高山寺三重塔

〔棟札〕『修理工事報告書』による。

一切日皆善　一切宿皆賢　願主　單衣木食故信　檀那　松下市郎兵衛　松本孫兵衛秀預

（表）バン　諸佛皆威徳　羅漢皆断漏　導師　専照寺法印知榮　十方諸檀越　工匠

以斯誠實言　願我常吉祥　別當　高山寺法印秀榮　檀那　和田　九之丞　大久保勘左衛門秀與

（裏）

寶珠在レ窟不レ瑩則無二雨寶之功一智鏡處レ心無レ縁則闕二利物之力一　是故能磷レ石長時積二六度行一耗レ芥永歳蘊二萬行之因一　覚山妙果不レ可レ不レ仰徳海普因不レ可レ不レ修　皇
山川険谷中哉唐哉　故源右大將公傳二聞夷一東夷伐二西戎一蕩々乎止民於蒼山之安一　其儻遊二紺園之日感二地霊一爲レ祈二寶祚長遠天長地久一修二三級法界塔一　能事畢来蓋四百有余年矣　歳月倍
迦陵頻伽聲　深而梁棟頽敗丹砂荒涼顚倒將無レ日矣　伏以惟秀栄闍梨體禀二浮華之世一心清濁濫之時一智辯二波瀾口吻黄巻括二囊心藏　可レ謂勤レ迹徐任二高山摩々帝一有レ年　茲修補當
命命等諸鳥　其仁一日言レ師補二舊制一師快然諾　謹以往元祿七年併二力於単衣木食故信一以馳二駆東西一経二營日夕歸二一粒一銭乎法界塔一　無レ不歸レ化　則四表行盈八荒一自北自レ南材爐雲集
霧列樺爐件儒棲闌居楔會一得其美一結構五年而成　且造二大日尊一軀弥陀釋迦尊各一軀安二置其中一　迦レ之延二颯斗藪四十口一荘二厳爾界梵莚一供二飛曼荼諸尊一　爰則龍
象逶迤梵鐘寥亮寺前松杉示二常恒不変之真相一山頭之紅楓增二随梁変化之妙色一玉幢嚽々寶輪錚々答二此白業洗二四恩一及二五類一　十方檀越斉
悉聞其音聲　遊レ常住之寶利一　旹元祿第十一禩次戊寅孟冬初五　法弟舜詔謹書

六　若一王子神社三重塔

〔相輪銘〕

宝永六年己丑今月吉日　信列安曇郡仁科大町　鋳物師　当国松本之住　小野吉次
上野国松枝之住　藤原正成作

〔風鐸銘〕

信州安曇郡　仁科大町王子　三重塔用　宝永八辛卯　二月吉祥日

〔棟札写〕　大町市「栗林士郎氏文書」による。

御郡御奉行
山崎伊左衛門
秋本源五兵衛
堀九郎左衛門
吉田甚五兵衛

勧主帰命山弾誓寺六世定誉故信法阿
勧化添人　栗林平右衛門　日番　和田甚五郎　塔建立奉行　栗林七郎兵衛
同　永田新助　浅野太兵衛
同　曽根原善右衛門　大嶋四郎左衛門
同　伊藤半六　中澤八兵衛
同　金原又七　曽根原仁兵衛
棟梁　金原作助　浅野治郎右衛門
墨棟梁　曽根原善左衛門
釿始　金原五郎七　曽根原善兵衛
同　金原勘五郎　伊藤清四郎
(詰か)常結大工　船山新七　合木彦市
同　西澤惣右衛門　矢口忠兵衛
同　身延源右衛門　福嶋太郎右衛門
同　平林小右衛門　福嶋政右衛門
同　船山八右衛門　曽根原八郎右衛門
同　合木門之丞　曽根原文四郎
同　西澤弥市　平林半兵衛
日番　伊藤清右衛門　栗林弥治右衛門
伊藤十右衛門　曽根原七左衛門
船山与四右衛門　河西清右衛門
福嶋権八　曽祢原庄太郎
田中兵五郎　曽根原伊兵衛
百瀬新右衛門　浅野助太郎
田中利兵衛　栗林五兵衛
石原吉左衛門　曽根原伊右衛門
曽根原勘兵衛　栗林五郎右衛門
栗林七郎右衛門　大町大小氏子不残
常詰人足重三郎

△大日如来阿閦如来宝生如来

塔建立者寶永八辛卯天二月吉祥日社僧金峰山神宮寺住弘岸敬白

釈迦如来　御代官
同　金原善七
(詰か)常結大工　矢木源七
同　大橋久右衛門
同　大町惣大工
(詰か)常結木挽　髙橋徳之丞
同　山本小兵衛
同　金原権右衛門
大町惣木挽

哀愍衆生者　応万機満願　始　村瀬文左衛門

勧進者帝尺天　中　尾崎新兵衛
天下泰平国土安全祈処　葺大工　松本金兵衛
鋳物師　藤原吉治
鍛冶　柿崎伝右衛門
終　坂原兵太夫
同　石原助右衛門
金物師　原田角右衛門
塗物師　千村又右衛門
同　伊藤新平

封

聖主天中天
大檀那大梵天王
迦陵頻迦聲
弥陀如来

大檀那水野隼人正忠直公
経億劫難遇(遭か)

封

我等今敬礼

七　真楽寺三重塔

『造塔勧化帳』（享保九年）に次の記がある。

人足三百人　古ハ金子ニ而被下置候
右者造塔普請之節可被下之也
牧野内膳正寺社役
辰八月　今枝九郎右衛門（印）
太田彦右衛門（印）
成瀬番左衛門（印）
今枝藤左衛門（印）

寛延二己巳年七月朔日
右人足為賃銀金六両弐分
相渡之

八　光前寺三重塔

〔棟札〕

（表）　聖主天中天　迦陵頻伽声
奉再建三重塔一宇天長地久堂宇安全　真俗円満　当處繁昌　祈之攸
哀愍衆生者　我等今敬礼
封　大工棟梁当国上諏訪　立川和四郎
同枠四郎治

（裏）（バン）　旹文化五辰年八月吉旦当院現住権大僧都寂応敬造立之
伊藤久米右衛門
封　柿師棟梁高遠下町板町邑　和子円　治
同所　松沢権右衛門
□北原茂三郎
鉾持村　池上長吉
的場村　大石富三郎

九　貞祥寺三重塔

〔露盤銘〕

嘉永二年　八月吉日　七十七世　俊恵代　□

十　横蔵寺

〔初重側柱墨書〕

此柱　三□浄円禅定門　為佛□□寄進　寛文三天卯五月廿一日

〔寺蔵記録（享和二年　義要写）〕

濃州大野郡横蔵寺塔婆棟簡寛文三天癸卯林鐘二十八日

大工江州坂田郡顔戸村藤原朝臣羽渕新助家次廿四歳

手伝　同舎弟羽渕小三郎

同　舎弟羽渕又十郎

同弟子　同国八条村六兵衛

釘始己亥霜月十一日　柱立癸卯卯月五日　真柱立同五月五日

供養日同六月廿八日

十一　国分寺三重塔

〔擬宝珠銘〕

飛州高山　国分寺　文政三庚辰臘月　奉鋳境内ニテ　越中住　鋳物師　金森与八郎　藤原正治

『飛騨国分寺現塔由来其他』（大正十五年）に「紙魚のやとり」から以下の文が引用されている。

○文化十二年国分寺宝塔再建之事　寛政三亥八月廿日大風にて宝塔吹倒候砌（後略）。

○文化十四年国分寺薬師如来開帳云々（中略）并塔再建に付此節地突之仕度あり、夏地突。

○文化十五年寅年五月十二日国分寺宝塔釿始。

○文政二卯年九月下旬より国分寺宝塔建物、下一重建、後二重暫く延々之体皆出来いつ共不知、心柱雨風に晒し有之處翌辰二月二重目出来、辰秋中大工方皆出来、辰十月十二日九輪鋳始幾度にもなり、露盤四尺四方水烟迄高壱丈八尺、九輪惣目形五拾貫目ばかり、十一月廿二日鋳じまい。

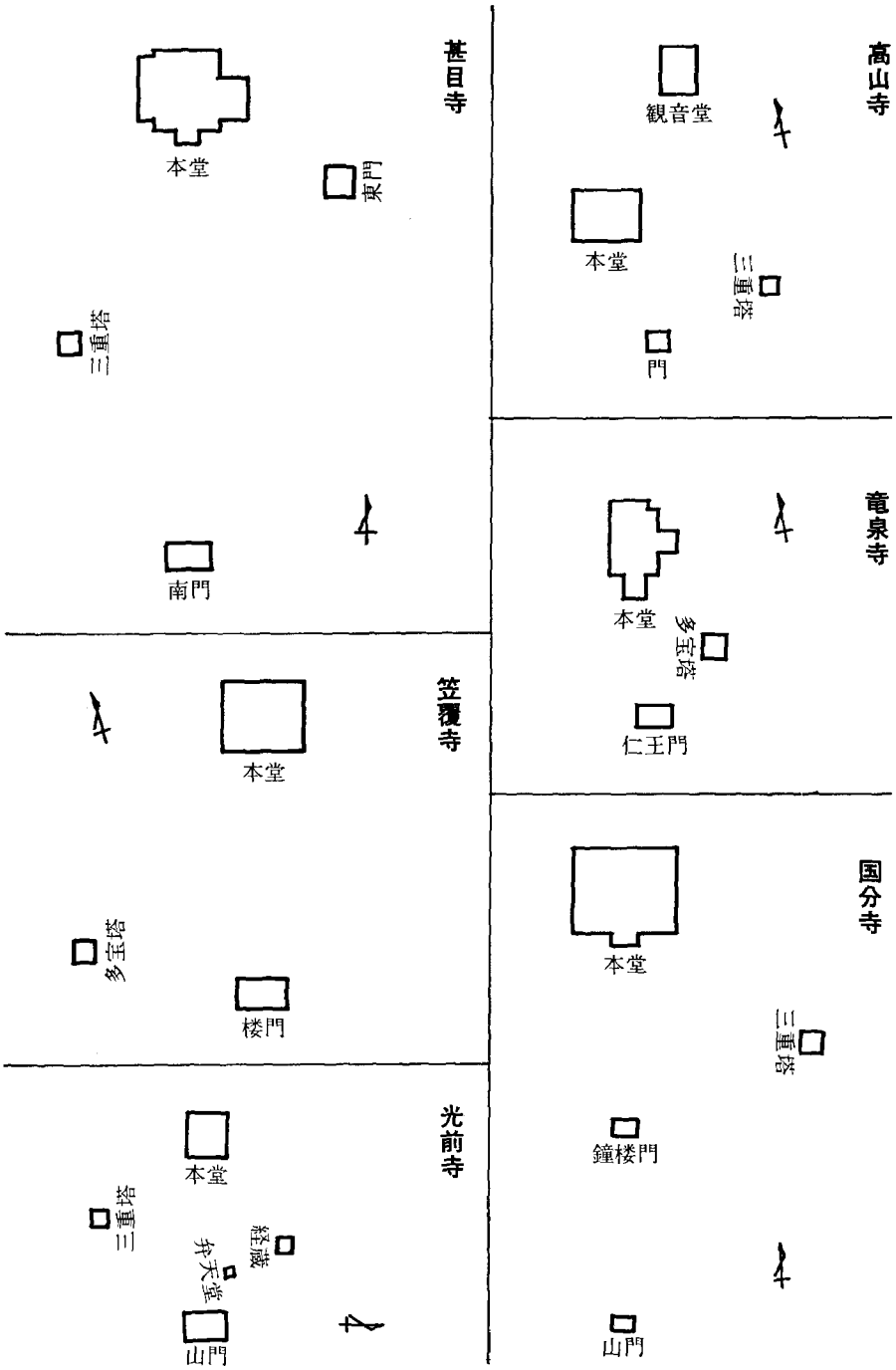
○大工水門相模棟梁也。九輪鋳物師高岡釜屋與八郎。

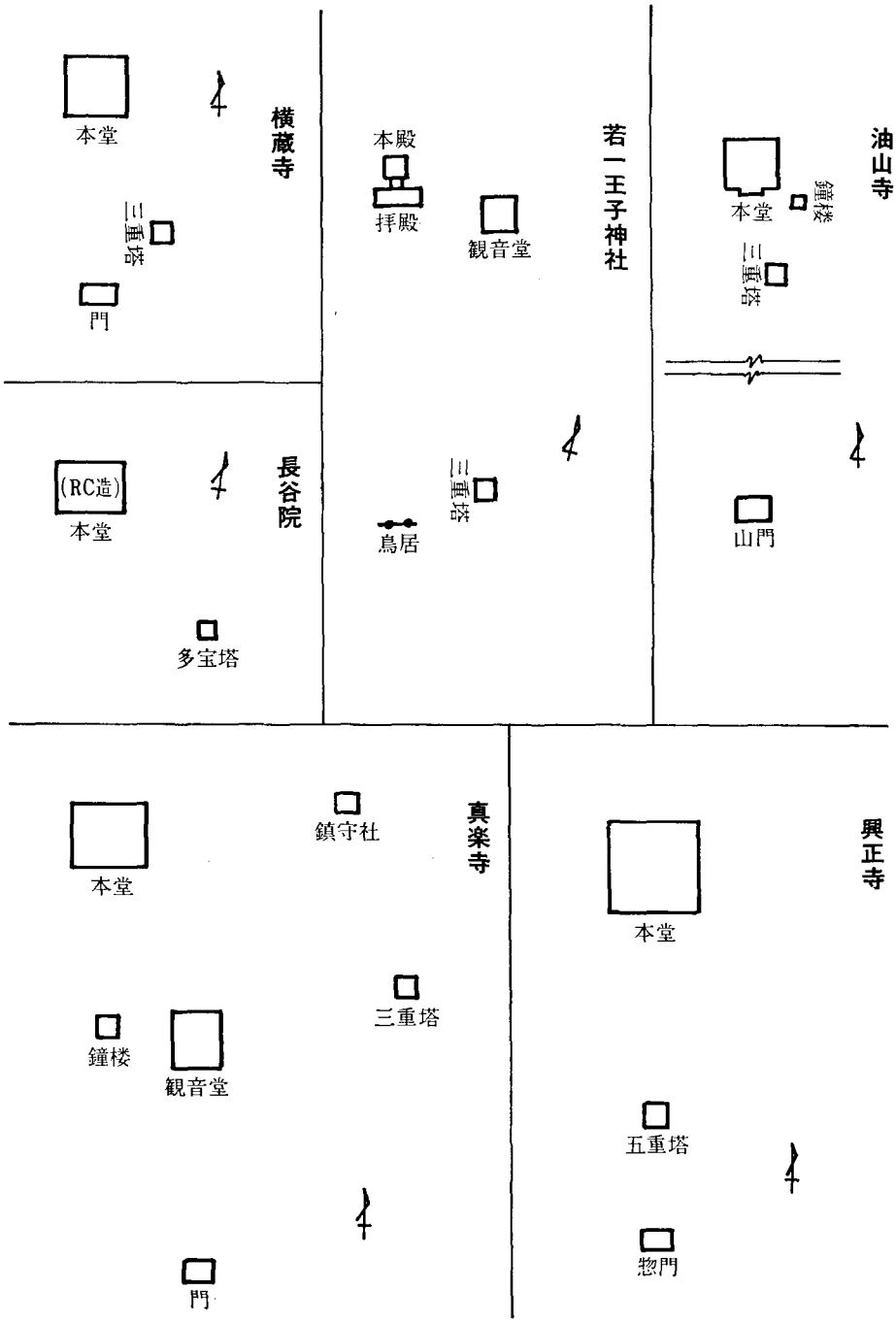
十二　油山寺三重塔

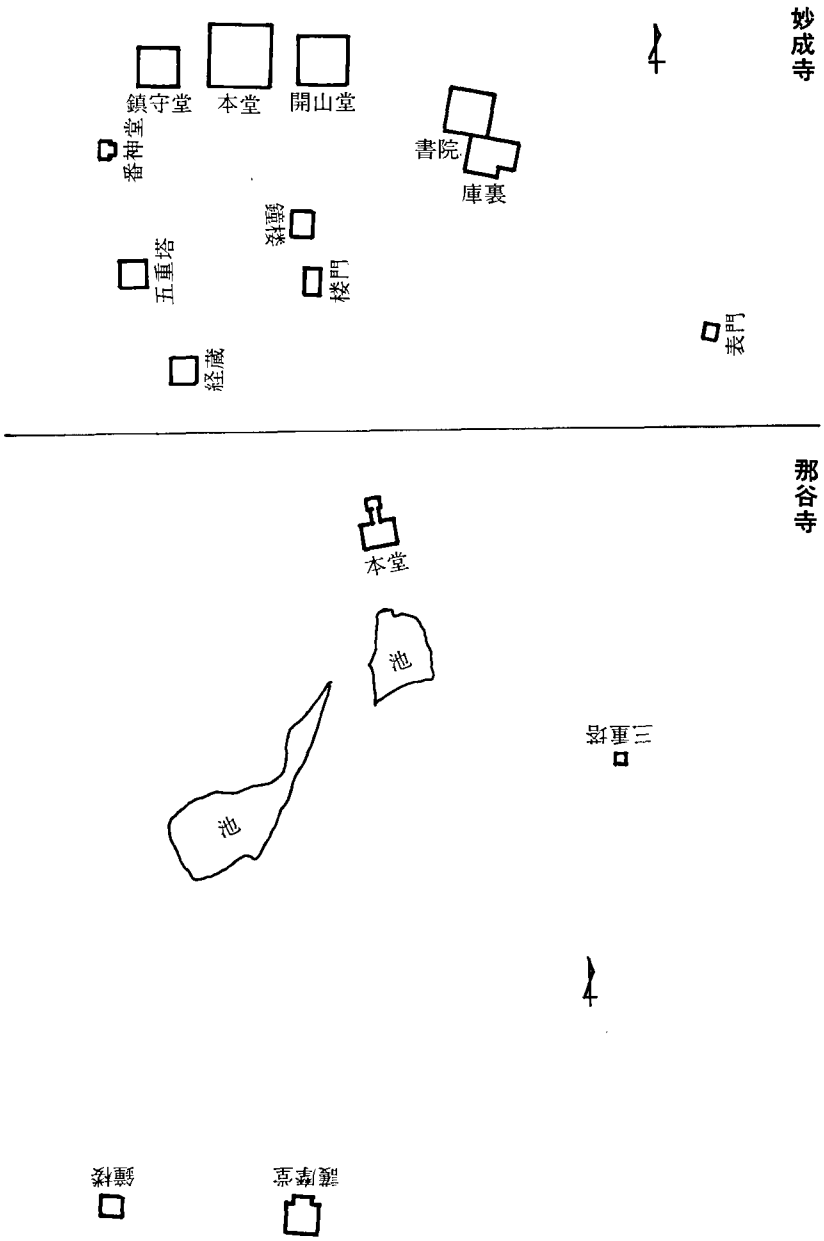
〔伏鉢刻銘〕

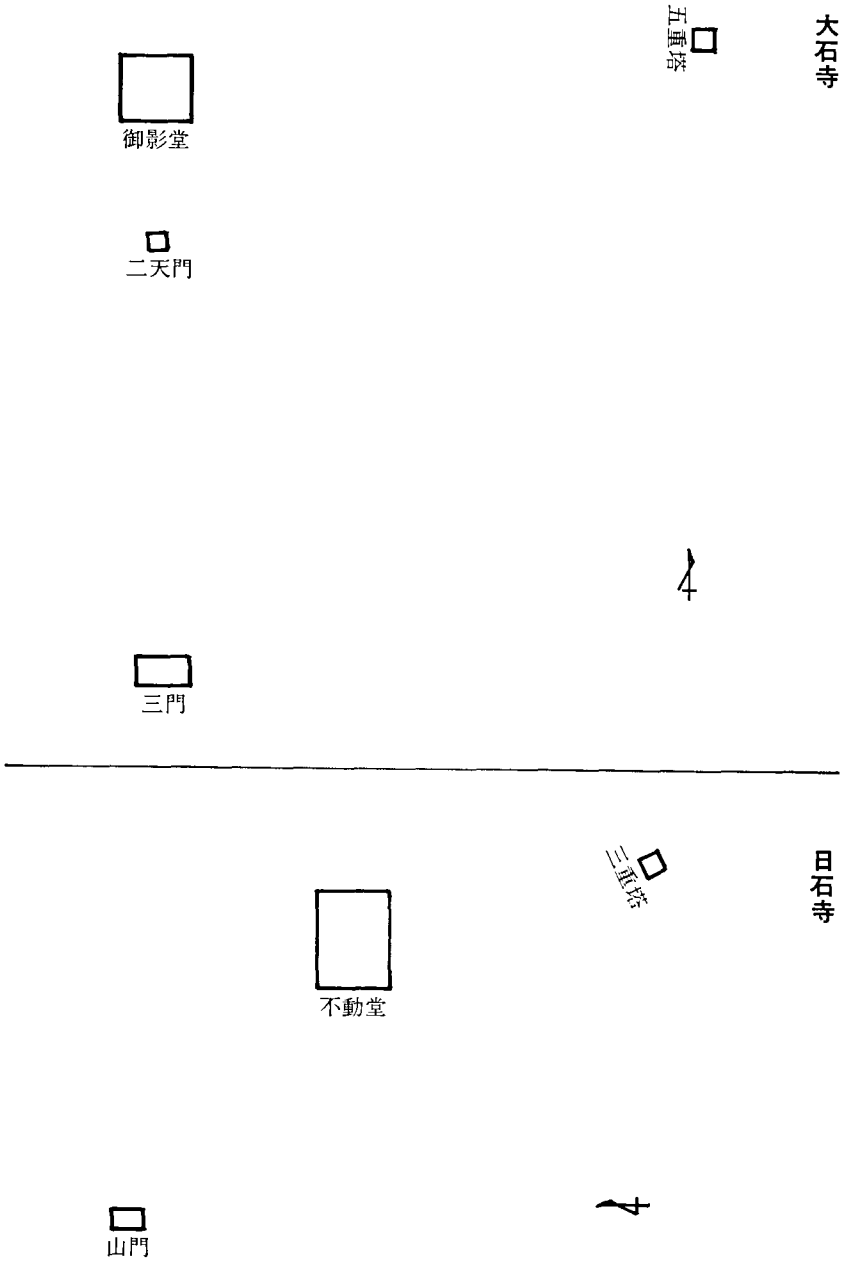
東海道遠州周知　之郡油山薬師塔　之九輪　大旦那　久野三郎左衛門尉宗成　慶長拾六辛亥年正月吉日　山城国愛宕之郡三條　釜之座鋳物師大工　早川長兵衛藤原光政

〔付図〕配置図


高山寺
観音堂
本堂
三重塔
門
竜泉寺
本堂
多宝塔
仁王門
国分寺
本堂
三重塔
鐘楼門
山門
甚目寺
本堂
東門
三重塔
南門
笠覆寺
本堂
多宝塔
楼門
光前寺
本堂
三重塔
経蔵
弁天堂
山門


横蔵寺
本堂
三重塔
門
若一王子神社
本殿
拝殿
観音堂
三重塔
鳥居
油山寺
鐘楼
本堂
三重塔
山門
長谷院
(RC造)
本堂
多宝塔
真楽寺
鎮守社
本堂
三重塔
鐘楼
観音堂
門
興正寺
本堂
五重塔
惣門


妙成寺
鎮守堂
本堂
開山堂
番神堂
書院
庫裏
鐘楼
五重塔
楼門
経蔵
表門
那谷寺
本堂
池
池
三重塔
鐘楼
護摩堂


大石寺
五重塔
御影堂
二天門
三門
日石寺
三重塔
不動堂
山門

Designs and Structures of Japanese Pagodas in the Early Modern Times (III)

HAMASHIMA Masaji

This is the third edition for the research and study on the designs and structures of pagodas built during the Momoyama and Edo periods. In this edition, the structural remains in the central district of Japan are discussed. Following are the contents:

1. The date of construction and carpenters participated in the construction works, etc.
2. The size of the site, etc.
3. The style at the detailed parts and the methods
4. Cofiguration of interior and structure of setting up
5. Arrangement of pagodas in temples

Among those, sections 1~4 are discussed by classifying into five-storied pagodas, three-storied pagodas and Tahoutou pagodas. Section 5 is discussed the five-storied pagodas, three-storied pagodas and Tahoutou pagodas combined together.

写真 3　大石寺五重塔（外）

写真 1　妙成五重塔（外）

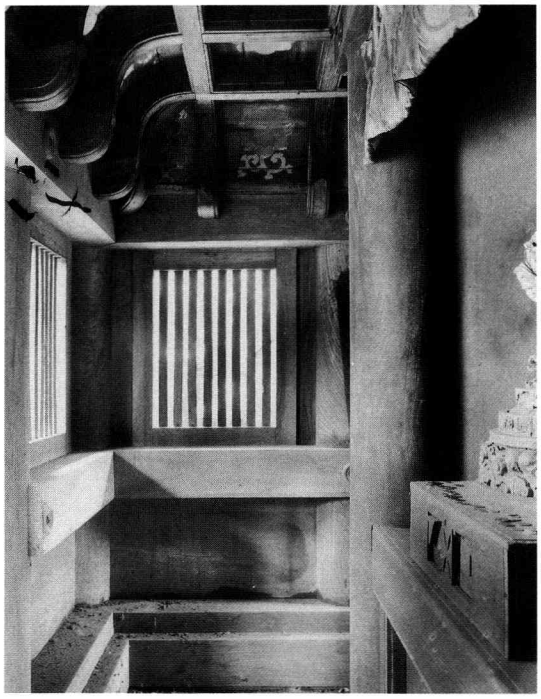


写真 4　興正寺五重塔（内）

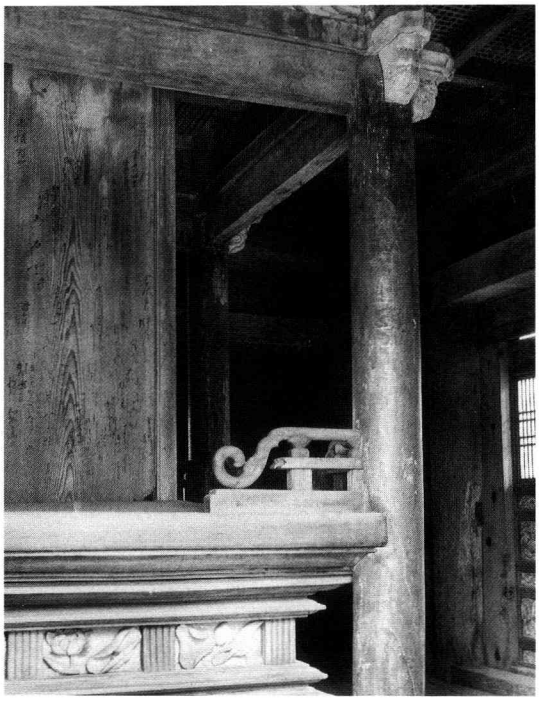


写真 2　妙成五重塔（内）

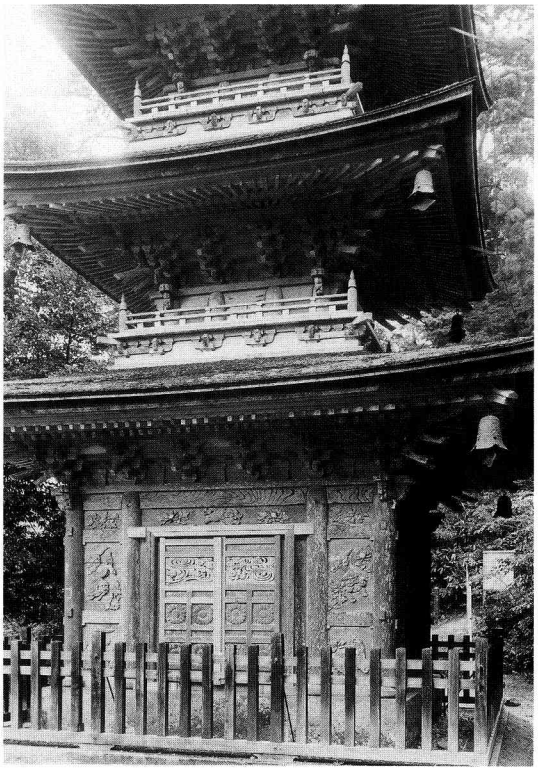


写真 6　那谷寺三重塔（外）

写真 7　那谷寺三重塔（内）

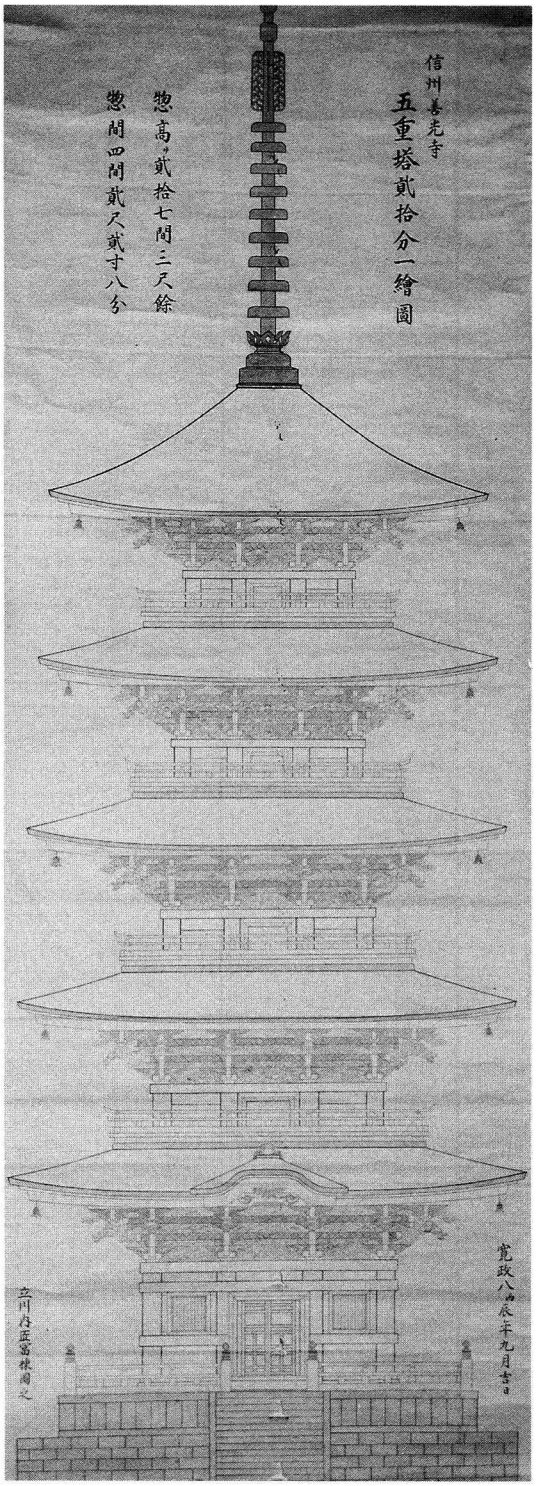


写真 5　善光寺五重塔古図

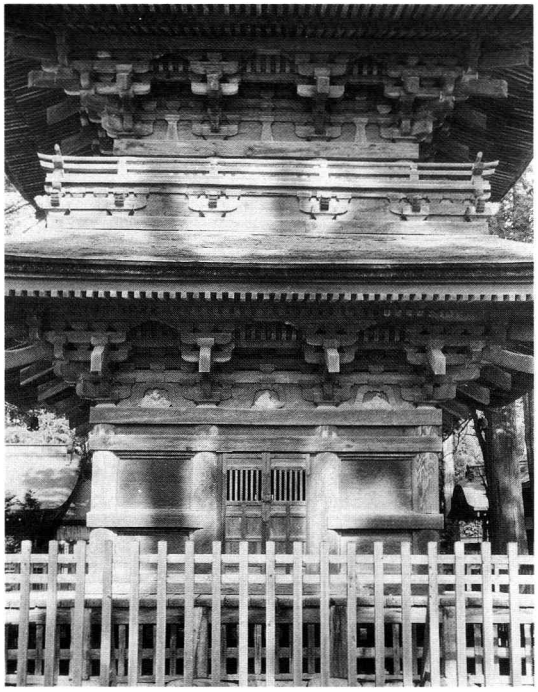


写真10　若一王子神社三重塔（初・二重）

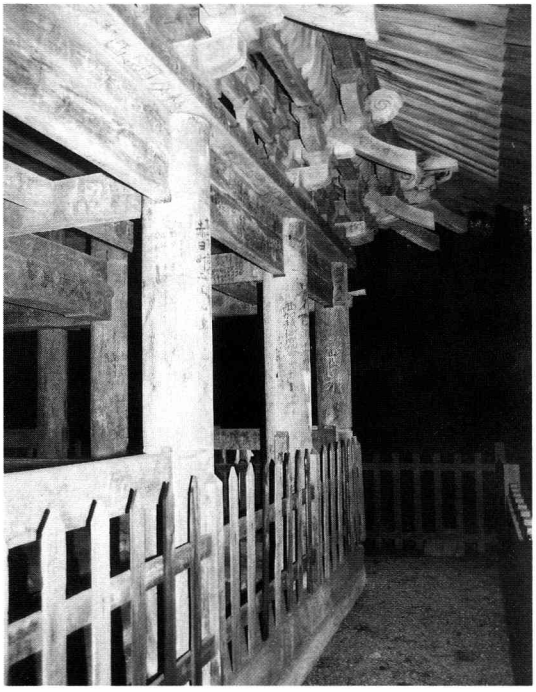


写真 8　日石寺三重塔（初重）

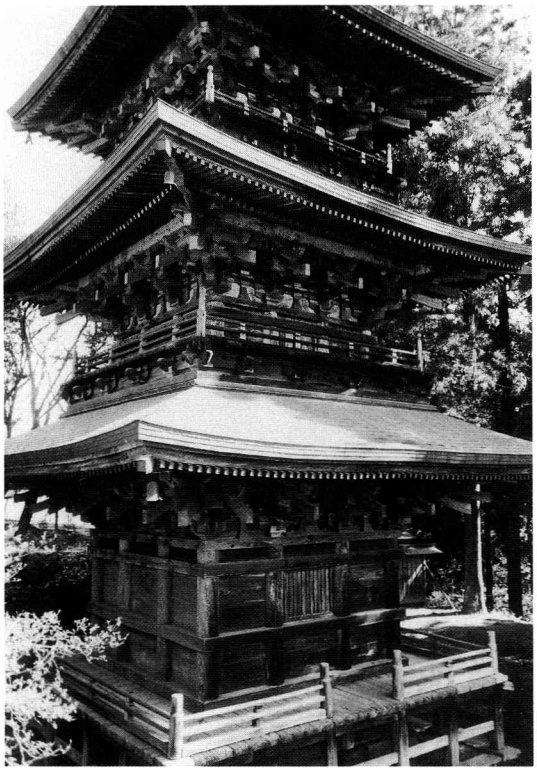


写真11　真楽寺三重塔（外）

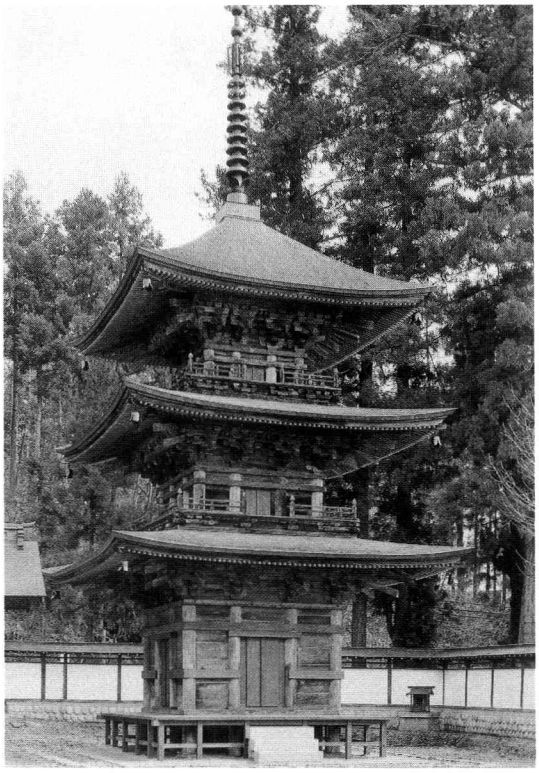


写真 9　高山寺三重塔（外）

写真14　真禅院三重塔（外）

写真12　光前寺三重塔（外）

写真15　横蔵寺三重塔（初重）

写真16　横蔵寺三重塔（細部）

写真13　貞祥寺三重塔（外）

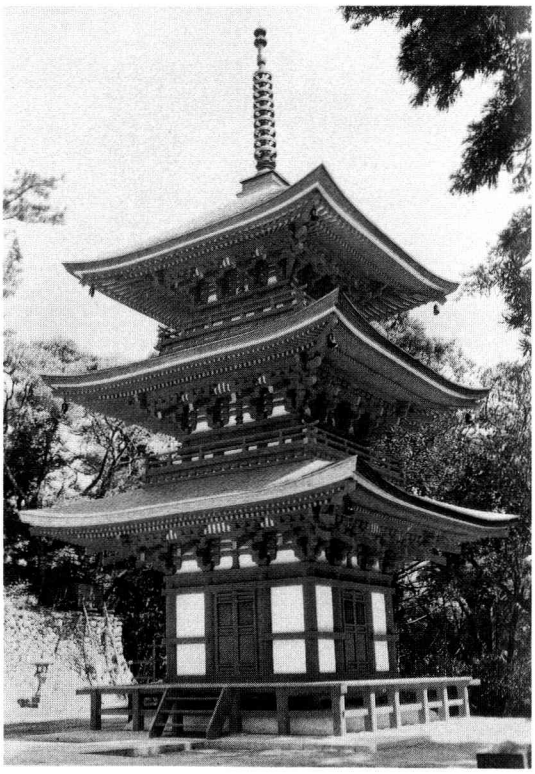


写真18　油山寺三重塔（外）

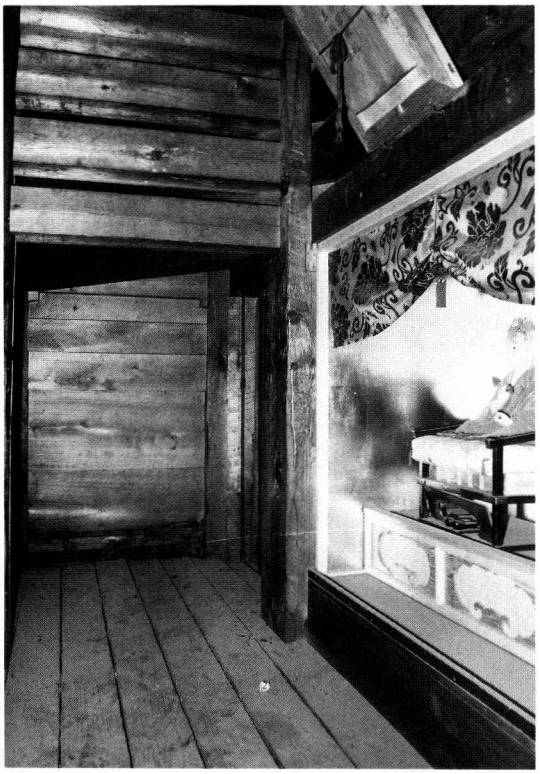


写真17　国分寺三重塔（二重内）

写真19　油山寺三重塔（内）

写真20　甚目寺三重塔（外）

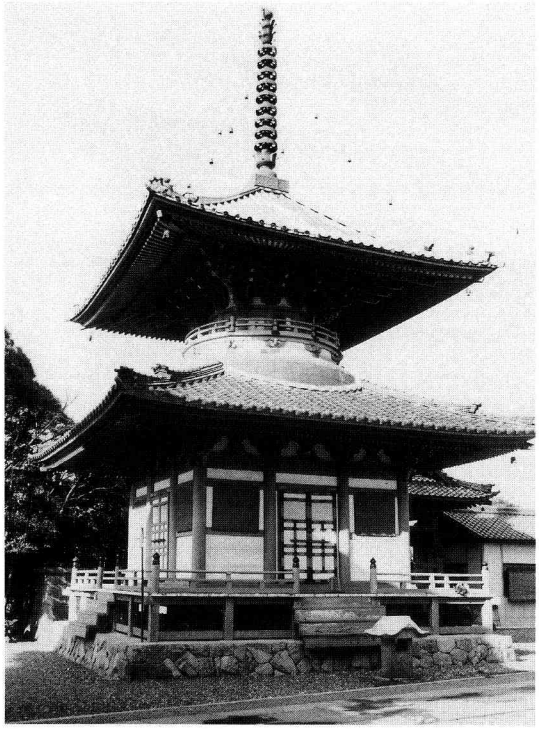


写真23　竜泉寺多宝塔（外）

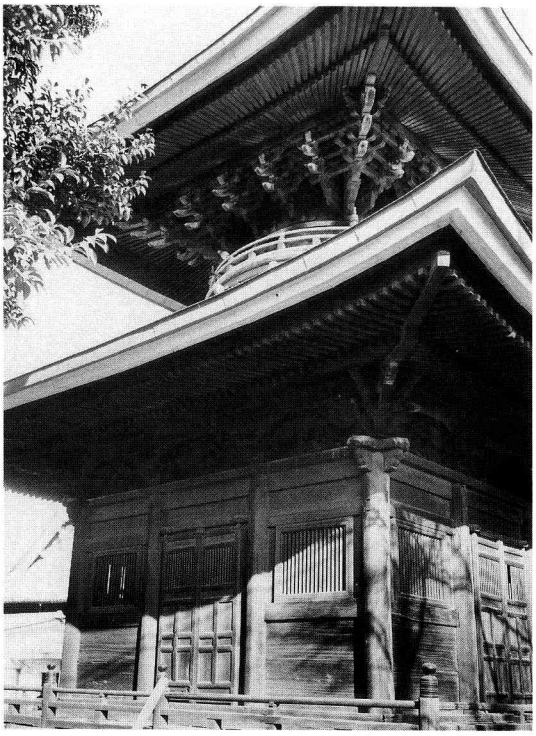


写真21　笠覆寺多宝塔（外）

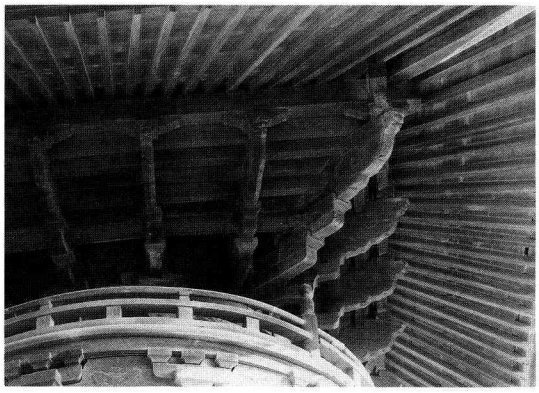


写真24　長谷院多宝塔（二重）

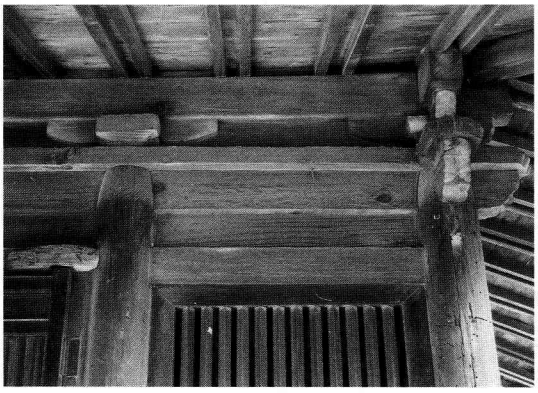


写真25　長谷院多宝塔（初重）

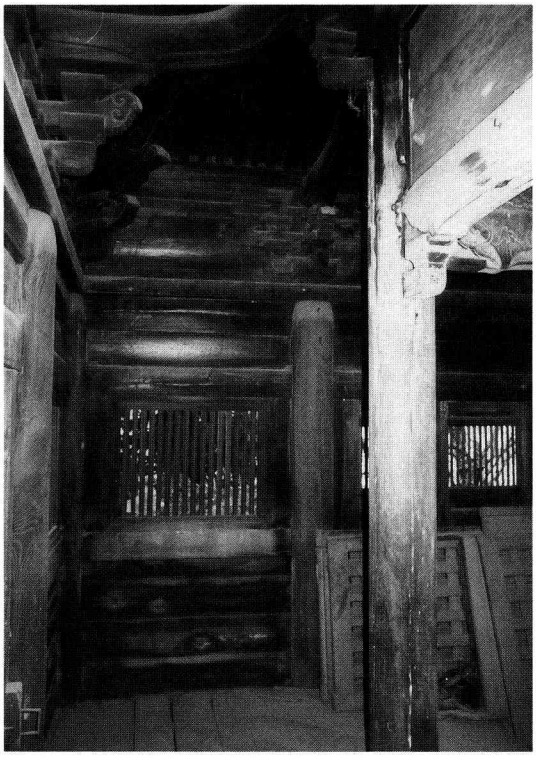


写真22　笠覆寺多宝塔（内）